

『五柳先生伝』の「不求甚解」について

中国学科 春日井幹三

先に私は、中国の初中1年後期の語文教科書に陶淵明の『桃花源記』が載っていることを報告したことがあるが、続く2年前期にも『五柳先生伝』が採られている。社会主義的資本主義経済(?)が発展し、少々拝金趣味が感じられる現代中国で、子供たちに清貧詩人陶淵明を読ませようという方針に対して、私は、興味を抱き、好ましくも感じるのである。

『五柳先生伝』は、五柳先生という架空の人物に仮託して陶淵明自身を語っている、中国文学史上初の自伝(?)であるが、さっそく冒頭部分を見てみよう。

先生不知何許人也、亦不祥其姓字、宅辺有五柳樹、因以為号焉。閑静少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解；每有会意、便欣然忘食。(注1)

先生は何許(イコ)の人なるかを知らざるなり。亦(マ)た其の姓字を祥(ツビウ)かにせず。宅辺に五柳樹有り。因(ヨ)りて以て号と為(ナ)す。閑靖(カシイ)にして言少(スガ)く、榮利を慕(メ)わず。書を読むことを好めども、甚(ハカ)だしくは解することを求めず。意に会(カ)すること有る毎(ゴト)に、便(スガ)ち欣然(キゼン)として食を忘る。(注2)

「閑静」と「閑靖」は同音なので、テキストによる違いと思われる。ひとしく、物静かで心安らかなことを指すのであろう。井波律子の訳をあげておく。

先生はどこの人かわからない。本名も不明である。家のそばに柳の木が五本あるため、五柳先生と号している。もの静かで寡黙であり、名誉や富を問題にしていない。読書は好きだが、とことんまで理解しようとは考えない。ただ、自分の気持ちとぴったりするところがあると、うれしくてたまらず、食事をするさえ忘れてしまうのである。(注3)

さて、今回問題にするのは「好讀書不求甚解」の7字である。日中辞典で「不求甚解」を引くと、「<成>(大意をつかむだけで)徹底的に理解しようとはしない」とあって、
読書不應該不求甚解。

本を読むときは、通り一遍の読み方をすべきではない。(注4)

という用例が載っていて、私はたまげてしまった。本を読むときには枝葉末節にとらわれ

ずに著者の言わんとする大意を掴むのが大切だ、と解釈するのが普通ではなかったか。もっと言えば、読書家陶淵明が読書の楽しみの極意を伝授してくれていると理解していた。不求甚解でなければ、読書を好むことも、欣然として食を忘れることもできないのである。さきの『桃花源記』についての報告の最後にこの句を引用したのは、そういうつもりであった。それなのに、これはいったい何なのか？ 陶淵明の深遠なる読書哲学が曲解されて、正反対の意味に化けてしまっているのではないか。また別の辞典にも、

読書不求甚解、只懂得皮毛、那怎麼行？

本を読んでも細かく理解せず、字面を理解するだけでよいのだろうか。(注5)

という用例を見つけた。字面を理解するだけではいけないというのが陶淵明の主旨なのに、びっくり仰天、あわてて手許の『現代漢語詞典』にあたってみると、

原指読書要領会精神實質、不必咬文嚼字。

現多指只求懂得個大概、不求深刻了解。(注6)

「ももとは、読書はその精神の本質を把握することが必要で、文字面にばかりこだわってはいけない、ということを目指したが、現在では多く、ただあらましを知りたがるだけで、深く了解しようとはしないことを指す」とでも訳せようか。ちゃんと原義を説明していて、さすが『現代漢語詞典』だけのことはある。なお「咬文嚼字」は、文章を読むときに字句ばかり詮索し、神髄を理解しないことを諷刺するという成句である。

また、『古代漢語詞典』の「不求甚解」の項目には、

原意是說讀書只求領會要旨、不過于在字句上花功夫。陶淵明《五柳先生傳》：

“好讀書、～。”後多用來指對待學習、工作不認真、不求徹底理解。(注7)

「もとの意味は、読書にはただ要旨を把握しようとして字句上にはたまひまかけすぎないことをいう。後には多く、勉強や仕事に対してふまじめでとことん理解しようとはしないことを指して使われるようになった」と、古代漢語用なのに、わざわざ注意を促している。

これで少し事情が呑みこめてきた。もう一度原文に戻ろう。「好讀書不求甚解」の7字が(A)「好讀書」と(B)「不求甚解」という二つの部分に分かれることは、意味からも文章のリズムからもうなずける。しかし(A)と(B)はどのような関係でつながっているのだろうか。中国語はあまり接続詞を使わない言語である。原文でも使われていない。そして著者が接続詞を使っていないときには、よほど自明の場合はともかく、そのまま素直に、「書を読むことを好みて、甚だしくは解することを求めず」と、順接で読むのが自然というものであろう。しかし日本人は、「書を読むことを好めども」と、ありもしない逆接の接続詞をかつ

てにつけて訓読してきた。真理は往々にして凡人の常識的判断を越えたところにあるのだが、書を読むことが好きではない平凡な学者には、順接ではいかにも理解不能だったのであろう。そして中国人もたぶん暗に逆接の接続詞を付加して読んできたと思われる。「不求甚解」はいつのまにか貶められて貶義詞になり、今日では、陶淵明は自分のことを不求甚解と謙遜したのだ、と解釈されかねないのである。ついでにいうと、少々無理ながら、(a)「好」(b)「読書不求甚解」という切り方も可能で、「書を読むに甚解(ジ`ンカ)を求めざるを好む」とでもなろうか。こう読んでいたら曲解されることはなかったであろうが、これでは、読書が大好き、という意味にはならないし、文章のリズムも不自然である。

なお、一海知義は、清の方宋誠の注を紹介して、「重箱のスミをほじくるような書物の読み方、六朝時代にも盛行した訓詁義疏(クワヅリ)の学、その『煩瑣主義』に向けて放った、淵明の皮肉な矢だった、というのであろう」(注8)と解説している。

「不求甚解」を四字成語として使っている実際の文章はないかと、成語詞典に当たってみると、原典である陶淵明の原義とともに、なんと毛沢東の文が例としてあがっている。

現在我們很多同志、還保存着一種粗枝大葉、不求甚解的作風。(注9)

「現在、我々の多くの同志は、未だにある種、粗枝大葉で不求甚解なやり方を保ち続けている」というのだが、「粗枝大葉」は朱熹に出典をもつ四字成語で、仕事のやり方がふまじめでおおざっぱなことの喩えであり、「不求甚解」も同じ意味の成語として使われているのは明らかである。

またある日、まったく偶然に、老舎の文中で「不求甚解」に出くわした。

我有個很大的毛病：読書不求甚解。(注10)

子供向けの「読書を語る」というエッセイを、老舎は、「私には大きな欠点がある。本を読むのに不求甚解なことだ」と書き出していたのだ。幽默作家の老舎のことだから、なにか仕掛けがあるかもと用心して読み進めても、そうでもなさそうだ。陶淵明の「好読書不求甚解」7字の初め1字を削って、つまり前述の(b)を自分の欠点だといっているのである。これでは、陶淵明はその欠点を好むことになってしまうのではないか。老舎は子供のころディケンズを愛読したようで、彼の良質なユーモア感覚はそうして養われたらしいことが分かってなかなか興味深い内容ではある。

偉大なる領袖毛主席と文豪老舎に挟み撃ちされては、我々が田園詩人陶淵明の抗議もとうてい太刀打ちできない。「不求甚解」は発明者の意図とは正反対の意味に変わってしまったのである。こういう話を吉池老師の研究室でして、偶然、そこにあった『現代漢語

詞典』を引いてみたら、なんと、上に引用した説明の後段しかないではないか。よく見るとそれは修訂本ではなく、旧版であった。たぶん読者からもとの意味が載っていないことに抗議が寄せられ、修訂本を出す機会に前段を書き加えたのであろう。そして日本で出ている辞書は、親亀こけたら何とかという状態になっている一方、親亀のほうは原義を追加して澄ましているという現状のように思われる。この問題のきっかけを与えてくれた中日辞典は、最近出た第2版で、例文を削除して親亀の後を追ったが、原義は載せていない。

陶淵明を好きな日本人は多いから、「不求甚解」は日本人の文にも現れているのだろうが、浅学菲才な私はついぞお目にかかった記憶がない。と思っていたら最近、高島俊男の文章が目にとまった。

このような検討に際して先生が引く文献はほとんど無数だが、しかしそれらの材料から過度の意味を引き出すことはない。……前野先生はそういうのとは無縁である。甚解(ジソカ)は野暮の骨頂である。(注11)

前野直彬の著書の紹介文である。なお、著者は陶淵明の7字を、「本をよむのがすきだったが、無理な解釈はしなかった」と訳している。過去形で訳してあるのは、陶淵明は、分身の五柳先生が故人という設定で伝記を書いたので、神経が行き届いている。しかし、井波訳とともに逆接になっているのには訓読の影響を感じる。中国のふたつの辞書のように、もっと積極的な意味にとるべきだ、というのは野暮の骨頂の甚解か。

(注1) 初級中学教科書《語文 第三冊》人民教育出版社 2001年 p129.

(注2) 一海知義『陶淵明 虚構の詩人』岩波新書 岩波書店 1997年 p113.

(注3) 井波律子『中国のアウトサイダー』筑摩書房 1993年 p46.

(注4) 『中日辞典』小学館 1992年 p126.

(注5) 『東方中国語辞典』東方書店 2004年 p119.

(注6) 中国社会科学院語言研究所《現代漢語詞典 修訂本》商務印書館 1997年 p107.

(注7) 《古代漢語詞典》商務印書館 1991年 p119.

(注8) 一海 p57.

(注9) 毛沢東《農村調査 序言》(《中華成語詞典》中華書局 2000年 p57引)

(注10) 老舍《老舍全集 第十六卷》所収 談読書 人民文学出版社 1999年 p393.

(注11) 高島俊男『本と中国と日本人と』ちくま文庫 筑摩書房 2004年 p415.